

■ 第13回『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』—スポーツの多様な見方、考え方—  
～ラグビーW杯 2019 日本大会から始まる “ゴールデン・スポーツイヤーズ”。

その先陣を切るラグビーW杯の「成功」で示したいスポーツの価値向上～

第2回「“平成最後の日本一” チームとして迎えるラグビーW杯 2019 日本大会。

そこから見える KOBE のラグビーと日本ラグビーのこれから。」

講師：福本正幸氏（神戸製鋼コベルコスティーラーズ チームディレクター）

野村周平氏（株式会社朝日新聞社 スポーツ部記者）

日時：2019年7月27日（土）18:30～20:00

会場：神戸国際会館セミナーハウス



今期2回目となる SCIX スポーツ・インテリジェンス講座。ラグビーW杯日本大会開幕まであと50日！というタイミングでの開催となりました。

ラグビーW杯日本大会を皮切りに、日本では「2020東京オリンピック・パラリンピック」「ワールドマスターズゲームズ2021関西」、そして「2021第10回世界パラ陸上競技選手権大会」（神戸市）と

世界的なスポーツイベントが続く「ゴールデン・スポーツイヤーズ」を迎えます。世界規模のスポーツ大会が、同一国に於いて、3年連続で開催されるのは世界でも初のこと。それだけに先陣を切るラグビーW杯は是が非でも成功させ、そのレガシーを含め、スポーツの社会的価値向上には先鞭をつけたいところ。果たしてラグビーW杯を含む、“ゴールデン・スポーツイヤーズ”の先に見えてくるのは、どんなスポーツ社会なのか。2回目以降の講座では、お二人の講師をお招きし、クロストークを繰り広げていきます。

SCIX 理事・美齊津氏の挨拶により第2回目講座がスタート。今回、講師にお迎えしたのは、神戸製鋼コベルコスティーラーズ チームディレクター・福本正幸氏と、朝日新聞社 スポーツ部記者・野村周平氏。拍手でおふたりを迎え入れます。

昨シーズンは18年ぶりに日本一の座を獲得、平成最後のラグビー王者に輝いた神戸製鋼コベルコスティーラーズ。迎えた2019年度はSCIX 理事長でもある、故・平尾誠二 GM が尽力されたラグビーW杯日本大会



が開催され、世界一を賭けた戦いを日本のチャンピオンチームという頂から眺めることになりました。日本ラグビー悲願の“ベスト8入り”を目指すジェイミーJapanを含め、世界の強豪チームは果たしてどんなラグビーを見せてくれるのか。今回は慶應大学ラグビー部OBの福本氏と野村氏のクロストークで、2019ラグビーW杯日本大会への期待、見どころから、日本のラグビーやKOBEのラグビーのこれからについて、語り合っていました。



前回の講座の最後、美齊津氏が「ラグビー記事を書かせたら右に出るものが居ない」と太鼓判を押した野村氏が冒頭、自己紹介の中でこうコメント。「スポーツ記者として記事を書く上で、子どもたちが楽しめるようにということを意識している」。この言葉に、単に勝敗や舞台裏を伝えるだけでなく、

ラグビーはもとより、スポーツを愛し、より良いスポーツ文化発展に貢献したい！と願う熱意あるスポーツ記者という印象を持った受講者も多かったのではないのでしょうか。

続いて、過去に自身が書いた故・平尾誠二理事長にまつわる記事を紹介する野村氏。「NZ（ニュージーランド）の強みはハカの3拍子」という見出し。プライベートで親交のあった世界的指揮者・佐渡裕氏から聞いた「（ニュージーランドの選手が試合前に行う）ハカは3拍子。ワルツと同じ。喜びや自主性を表現している」という話に興味を持ち、ニュージーランドの強さの秘密との関連性を見出したという平尾氏の逸話が書かれています。このエピソードについては、過去のSGIX講座でも取り上げられていますが、このハカのエピソードを始め、様々な異なる文化や考え方とラグビーを結びつける平尾氏に、「芳醇なラグビー文化を学んだ」「こういう記事が書いて光栄」と野村氏は言います。続けて発した「大きな枠組みで発想ができる稀有な存在」という言葉に、改めて平尾氏の偉大さと、喪失感を覚えた参加者も少なくないでしょう。

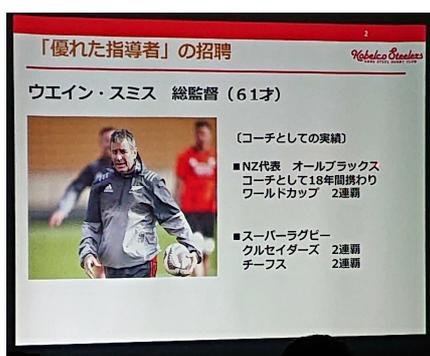
さらに、話題は神戸製鋼コベルコスティーラーズに関する過去の記事へ。「失った2年間 司令塔再び」という見出しで、SO 山中亮平選手について書かれた記事を紹介します。ドーピング検査で陽性反応を示し、国際ラグビーボード（IRB）から2年間の資格停止処分を受けていた山中選手が、神戸製鋼ラグビー部に再加入し、再出発するという記事。資格停止処分が下された当時、ラグビー部広報担当者から「（山中選手と）時々会ってやってくれ」と言われたこともあり、退部後もコンタクトを取っていたという野村氏。この記事は、まさに山中選手の復帰当日に書いた記事だとか。もちろん18年ぶりのV奪還記事も書いた野村氏。資格停止、退部という辛



い時期を見続けてきた立場として、昨シーズンの山中選手の活躍、そして神戸製鋼コベルコスティーラーズ王座奪還は「本当に嬉しかった」と率直な気持ちを吐露しました。

この話を受けて、神戸製鋼コベルコスティーラーズ チームディレクターとして山中選手を見てきた福本氏も「コーチ陣の期待にも応えて頑張ってくれた選手のひとり。決勝では頬骨を骨折しながらもやってくれた」と山中選手の活躍を称えます。さらに「今はとてもラグビーを楽しんでやっているのが伝わってくる。彼には諦めないことの大切さを教えてもらった。みんなにも伝えたい」と福本氏。

骨折を押しまでプレーし続けた山中選手含め、「チームのために頑張れるヤツが来い！」という想いでスタートした昨シーズンのコベルコスティーラーズ。「実際そうした想いを持ったメンバーがやってきてくれた」と福本氏は言います。平尾氏が監督を務めていた時代も、同じことを掲げていたそうですが、平尾氏退任後、チームに迷いがあったと明かします。再び過去を振り返り、「チームのために頑張れるヤツが来い！」という想いをウェイン・スミス新総監督が明確に提示したことが、チームにとって大きな変革のきっかけになったと福本氏。



スーパーラグビーでクルセイダーズを黄金時代に導き、オールブラックスのアシスタントコーチとしてワールドカップ連覇に導いた名将・ウェイン・スミス総監督によるマネジメントとは一体どういったものだったのか？コベルコスティーラーズはどのようにして王座奪還するに至ったのか？ウェイン・スミス総監督による改革について、福本氏がプロジェクターを使って具体的に説明してくださいました。

まず、ウェイン・スミス総監督が掲げたこと、それはアイデンティティの確立。「優勝」という目標達成に向けて多種多様な背景を持つ選手・スタッフを束ねて同じ方向へ向かわせるためには、「優勝しなければならない」共通の理由、動機付けが必要ということで「価値観の統一」を試みました。ここでウェイン総監督が問いかけたのがこちら。

- ・ 何のためにラグビーをするのか？
- ・ 誰のためにラグビーをするのか？
- ・ なぜ神戸製鋼でラグビーをするのか？
- ・ なぜ神戸製鋼はラグビー部をつくったのか？

...

福本氏自身、この問いかけに衝撃を覚えたと同時に、7連覇を達成した平尾誠二氏時代以前のチームのことや過去を振り返るいい機会になったと語ります。

ラグビー部メンバー = 神戸製鋼所の従業員 = STEEL WORKER

凄まじい高温の高炉施設で日々働く STEEL WORKER。阪神淡路大震災の過酷な状況下でさえも高炉の火を絶やさぬよう使命を果たした STEEL WORKER。STEEL WORKER とは、会社のため、仲間のために、困難な状況からも逃げ出さず、ハードワークする勇敢な人々。コベルコスティーラーズ

が目指すべき姿、それはまさしく STEEL WORKER＝「仲間のために困難な状況に立ち向かい、ハードワークする選手」と、チーム全員に定義付けたわけです。福本氏自身も「これまで自分自身も仕事とラグビーは分けて考えていた。言われてみればそうやな！と考え始めるようになった」と当時を振り返ります。



その上で、ウェイン・スミス総監督はさらに「我々は歴史の一部」という意識を植え付けます。我々が今戦っている試合の勝敗は未来へ続くチームの歴史の一部となり、ジャージを受け継いだ者は、チームの価値を高め、次代へジャージを受け渡すことが使命であると。また、会社やチームの先人たちの努力に思いを馳せ、リスペクトし、会社やチームの歴史や文化を学ぶことが愛着や愛情となり、心の拠りどころ＝プライドとなり、ひいてはそれが会社やチームへの帰属意識に繋がると提言。

さらに、製鉄会社のシンボル、魂とも言える高炉のうちの一つ、神戸製鋼所3号高炉の解体に対して、「おまえ達は何も感じないのか？」と問いかけたのだとか。阪神淡路大震災で被災し停止したものの、STEEL WORKERの不眠不休の努力により二ヶ月半で復旧させた、いわば神戸市民の震災復興のシンボル。その高炉が休止、解体されるにあたり、ウェイン・スミス総監督の問いかけがきっかけとなり、レガシー活動を行った選手たち。3号高炉で使用されていた耐火レンガに各人の名前を記入し、モニュメントが作られたそう。



レガシー活動の一環として、随所に会社用語を取り入れるなど、ユニークな取り組みも行われたとか。

例えば…

ウエイト場→第1高炉

DOJO（道場）→第2高炉

グラウンド→第3高炉

試合で最も体を張ってハードワークした選手に与えられる賞→TANAKA 賞（震災発生時に高炉を守るため、ショベルカーで突入した作業員の名前を冠した）

組織構造の改革としては、トップダウンからボトムアップの構造に転換。それに伴い、自主性の向上を図るべく、選手全員がリーダーとなり主体的に取り組めるよう、試合メンバー以外の選手にも重要な役割を与えるなど様々な工夫とテコ入れが施されました。

ウェイン・スミス総監督は人間性を重視する指導者だそうで、ラグビーだけでなく、人間性や社会性もチーム強化には重要であり、人間性、社会性の高い選手は仲間のためにハードワークできる選手と明言。「Better People make Better All Blacks.」というオールブラックスの選手選考基準を踏襲しています。人間性、社会性の向上、成長を図るにあたり、小学校児童登校見守り活動など社会貢献活動にも力を入れ、改革は多岐にわたっていたことがうかがえます。



ラグビーが大好きと公言する総監督ならではのとも言える改革の一つが「笑う!」「楽しむ!」ということ。「笑いはパワーの源」と毎朝簡単なゲームや手遊びなどを行い、みんなで笑って楽しむ時間を作っていたのだとか。スクリーンに映し出された選手たちの無邪気な笑顔が実に印象的でした。ダン・カーター選手とアンドリュウ・エリス選手も、よくスタバのコーヒーを賭けてキック練習をしている

というエピソードには、会場からどよめきと笑いが漏れました。

福本氏から最後に紹介された総監督による変革は、まっすぐ走る、BIGGA（倒れたら6秒以内に立ち上がって戦列に戻る）といった「基本の徹底」。ウェイン・スミス総監督の就任当初、選手たちのプレーを見てまず言われたことが「いつまで倒れているんだ!」だったそう。基本の徹底により高度なプレーが生まれる、これぞまさに STEEL WORKER そして Steelers としてのプライドというわけです。

福本氏から明かされたウェイン・スミス総監督による数々の改革。昨シーズンの飛躍とV奪還はその賜物であり、ある意味、なるべくしてなったと言えるかもしれません。

講座も終盤に差し掛かる頃、大学ラグビー界の話題へ移行。ウェイン・スミス総監督の話を受け、ボトムアップ構造にテーマが及びます。ボトムアップというと、全国大学選手権9連覇の偉業を誇る帝京大学ラグビー部のイメージが強いかと思いますが、実際、帝京大学ラグビー部取材で訪れたことのある野村氏はこう言います。「帝京に行くと気持ちがいい。しっかり挨拶してくれるし、何事も自分事としてチームに関与しているのが見て取れる。それは岩出さん(監督)が築いた。ラグビーのような団体スポーツには大切」。また、帝京の10連覇を阻止した天理大学を破り、2019年度全国大学選手権を制した明治大学ラグビー部も田中監督による新体制になり、雰囲気ガラリと変わったとか。ボトムアップを取り入れ、学生たちが戦略などにも関与し出し、自主性が育まれたことで強くなったのではないかと野村氏は分析。「自分らの時にもそうして欲しかったなあ」とこぼす慶応ラグビー部OB先輩の福本氏が、同部後輩OBの野村氏に同調を求め、会場からは笑いが起こるシーンも見られました。



最後は、あと 50 日ほどに差し迫った 2019 ラグビーW 杯日本大会について。「まさか本当に招致できると思ってもいなかった」という福本氏のコメントから改めて、ラグビーW 杯自国開催がどれほど貴重で偉大な大会かがうかがえます。「まだまだ先と思っていたが、もう 2 ヶ月足らず。

神戸（神戸製鋼コベルコスティーラーズ）からも選手を出しているの、期待している」と福本氏。続いて野村氏がこうコメント。「ラグビー文化を根付かせたい。こういった講座に参加するような（ラグビーに関心のある）人たち以外にも記者として伝えていきたい。チケットは既に 80%程度売れていて、8 月に再販すること。神戸大会は人気だが、チケットの売れ行きや、行政の温度感にも差がある。税金を使ってやる以上、ただの打ち上げ花火（的な一過性イベント）ではダメ。ラグビーの面白さや、外国選手との交流など、有形、無形問わず何が残せるかがポイント」。宣伝やアナウンスなどについては、「ワールドカップ」という表記を誰もが使えるわけではないなどの制約があるため、なかなか難しいようではありますが、W 杯というビッグイベントだからこそ、スポンサーなど様々なしがらみを無くせる機会なのでは？と講師陣、さらに美斎津氏も関係各所の動きに期待を寄せます。

その一方で、野村氏が、ラグビー協会がファンの存在を軽視していると苦言を呈す場面も見られました。来場者数や、その内訳データを取っていない期間が長いことを例に挙げ、「ファンに向き合う人が協会内にもっと居れば、みんなが応援するものになるはず！」と持論を展開。ラグビー人口の裾野を広げ、ラグビー文化を根付かせるべく「神戸が中心となって、ジュニア、ユース世代へ繋がる良いクラブにしていって欲しい」と先輩 OB に恐縮しつつもエールを送る野村氏。「頑張ります！」と力強く答える福本氏。慶応ラグビー部 OB の絆、そして、今なおラグビーの現場に身を置き、ラグビーを愛する二人ならではのやりとりで講座本編は終了しました。

会の最後は受講者からの質問タイム。「中学でラグビーをやる環境が少なすぎるのではないか？」など、熱心な受講者の皆様からの質問にも真摯にお答えいただき、第 2 回講座も大盛況で閉幕。台風による影響が危ぶまれましたが、今回も予定通り講座を開催することができました。このような状況にも関わらず、70 名にも及ぶたくさんの方にご参加いただき、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



今期最後となる次回の講座は8月24日を予定しております。まさにラグビーW杯日本大会開幕1か月を切るタイミングでの開催。講師は、W杯での試合解説はもちろん、開幕前イベントなどでも引っ張りだこのラグビージャーナリスト・村上晃一氏と、元ラグビー日本代表、現在は神戸親和女子大学で教授を務める平尾剛氏。「2019ラグビーW杯の『成功』でつかみたい『ラグビー人気復活』。そこから、もう一度始めたいラグビー文化定着への議論や取り組み——。」をテーマに語っていただきます。次回もたくさんのご参加お待ちしております。



(レポート 中野里美)

スポーツ振興くじ助成事業

